私のコーラスライフと職場合唱団

慶應義塾ワグネルソサイエティ男声合唱団ＯＢ
皆川　公一

私は、大学時代の四年間を男声合唱に浸って過ごして以来、今日まで、一人の音楽愛好家としてコーラスを楽しんできた。大学の仲間内では、然程活動に熱心ではない部員、と言われた時期が長かったように思うが、それがここ数年は様変わりした。本稿では、この間の事情を紹介し、極めて私的な「職場の音楽サークルの今」を考えてみることにしたい。

一　現在の私のコーラスライフ

まず、最初に、現在私が定期的に練習に参加している五団体について、団の特徴と入団経緯を、参加時期順に若干説明したい。

①木曜日：ワグネルＯＢ合唱団（略称）。

大学時代、木下保、畑中良輔両先生のご指導を受けられる感激を抱いて参加していたクラブのＯＢ合唱団。

卒業後、当然のごとくに参加。十五年程前、五十歳を前に、勤務時間にも余裕が出て定期的な活動を再開し、新曲にチャレンジしたり、現役学生の演奏会に応援参加したりして、忘れかけていた合唱の楽しみを思い出した。定期演奏会や、他団体との合同演奏会などで、年間四回程度の演奏会があり、東京・大阪で三十歳代から八十歳台までの九十人程が週一回の練習に集まっている。指揮者は団員指揮者に加え毎年外部のプロに指導をお願いしている。ＯＢ合唱団を起点に、他の大学のＯＢとの交歓演奏会や、自治体の「第九を歌う会」などのプロジェクトにも参加を始めた。やはり私のコーラスライフの起点となっている。

②火曜日：Ｍ社混声合唱団（仮称）。

小生が三十年間勤務し、今もＯＢ会に加入している昔の勤務先の職場の合唱団。

大学卒業後、約十年間在籍した。当時は、邦人作曲家の世俗的合唱曲を中心に、産業人合唱コンクールにも参加していた。その後、地方転勤や結婚、指揮者の交替などで二十年程離れたが、数年に一回、当時の仲間と飲んだり、演奏会を聴きに行ったりする付合いを続けていた。昨年秋、会社の合併周年記念に、社員オーケストラと一緒に「第九」を総勢三百人で演奏する、という企画に応募し、次回の企画（同じグループの合唱団と一緒にオーケストラ伴奏で、ドヴォルザークの宗教大曲

を歌う）にも正式参加している。練習は毎週火曜日夜の二時間の他、週末に四時間程度の練習時間を設けている。参加資格は、本社及びグループ会社の社員・OB・その家族。練習への出席率七割以上が、演奏会への参加資格。器楽・オルガン奏者であり宗教音楽の権威の水野克彦先生から発声法を含めた指導を受けている。

③火曜日：N男声合唱団（仮称）。

米国の中核都市で歌っていた駐在員仲間が帰国後再結集し、年一回の定期演奏会を目指して、毎月、火曜日一回、週末一回、計二回練習。練習後は飲み会に繰り出す。四年前、故北村協一先生の追悼演奏会の際、大学合唱団の先輩から参加を誘われ、職歴が共通し居心地の良さに惹かれ参加を始めた。M社合唱団と練習日が重複するが、何とか継続できている。

④月曜日：B混声合唱団（仮称）。

大学でバッハを中心に研究されている樋口隆一先生が主宰される合唱団。

都内近郊の高校生から八十歳までの幅広い年齢層のバッハ愛好家が、週一回の練習に参加している。宗教音楽の経験の豊富なメンバーが多く、譜読みは個人の責任、とする大人の合唱団。音色統一のため、毎回、演奏会のソリストを務めるプロの声楽家による発声指導を受けている。

私は、合唱を始めて、教会音楽とは全く疎遠だったが、由緒あるチャペルの雰囲気や指揮者の人間的・音楽的魅力、そして何よりもチャペルでのパイプオルガンや古楽器の伴奏で歌う澄んだハーモニーの素晴らしさに魅了された。勤務の内容が変わり六時退社が可能になったことから、四年前から参加している。

⑤水曜日：C社混声合唱団（仮称）。

C社OBでN男声合唱団のメンバーの方が参加されている職場合唱団。

会社やメンバーの雰囲気がM社の社風に通じていて居心地が良く、演奏曲目も邦人作品やミュージカルなど親しみやすく、以前参加していた頃のM社合唱団の楽しさを思い出し参加。気鋭の吉川貴洋氏が指揮者に招かれてから発声練習も充実し演奏の質が向上し楽しさが増してきた。本社及びグループ会社の社員・OB、家族に加え、メンバーの推薦と賛同が得られれば私のような外部の人間の参加も認められる。

年一回の定期演奏会の他、本社ビルでのロビーコンサート、大阪のメンバーとの交歓演奏会、クリスマスの街頭演奏会など、メンバーの確保に努めているが、中核となるべき本社の現役社員の部員減少が続くのが気掛かりの種といえる。練習会場は週末を含め、本社ビルの会議室を利用中。

二　参加合唱団の選択基準

これまで、職場の合唱団に限らず、私が参加する合唱団を選ぶ際には、参加願を出す前に、演奏会や練習を見学するようにして、次のような点を基準にしてきたように思う。

・音楽知識・経験が豊富で合唱指導に熱心な、プロの音楽家の指導を受けられること。
・毎回の練習に発声練習を組み込んで、音色、表現の統一を目指していること。
・指揮者と幹事団が、定期的、計画的に演奏会や練習計画を練り、実行し、財政的にも無理はないこと。
・他の参加合唱団の練習日程と原則重なら ず、会社勤務後、練習開始時から、最低七割の練習に出席できること。
・毎週の練習会場が原則、固定され通えること。
・団員の年齢制限がなく、幅広い年齢層のメンバーで構成されているか。
・練習後の親睦会等コミュニケーションが愉しめるか。

三　職場合唱団の魅力

全日本合唱コンクールの職場部門への参加資格には、『同一企業体、官庁等に属する役員、

従業員等で組織する合唱団』とあるが、私が参加しているM社、C社の合唱団のように、企業の本社及び関係会社のOB、OG、家族、取引・出資関係のある企業の社員や、派遣会社社員、メンバーの紹介と推薦で参加を認めているケースが多いようだ。この点、四十年前とは大きく変わっている。

私が参加する職場合唱団をみると、他にもメンバーに変化がみられる。M社混声合唱団を中心に、気がついた点を箇条書きにすると、次の通りである。

・複数の合唱団や合唱以外の音楽活動に参加しているメンバーの割合がかなり多く、カルテットや、独唱、市民オペラ、オーケストラなど音楽活動の幅が拡大している。

▲M社混声合唱団：M社混声合唱団と管弦楽団による会社合併周年記念の「第九」演奏会。

・大学のサークル活動以来合唱を続けている人だけでなく、音楽学校を卒業して、事務系の社員として勤務しているメンバーや、個人でヴォイストレーニングを受けているメンバーも珍しくなくなっている。こうした熱心なメンバーが中核となって合唱団のレベルを引き上げている。

・一方で演奏会を聴いて初めてコーラスを始めたメンバーもおり、平均的な技術レベル向上への工夫する必要性が高まっている。

こうした変化に対応して、M社、C社の合唱団が採ってきた対策は、

・メンバーの参加資格を明確にする。

・職場合唱団の理念を理解し、中長期的な視野で指導に当る指揮者を迎える。

・単独の定期演奏会以外に、会社の周年行事、地域のボランタリー活動などに参加し、演奏活動に変化を持たせ、合唱団の認知度向上と、新入部員の勧誘、メンバーの定着に努める。

・平日の練習に加えて土・日の昼間に月二～三回の練習を定期的に行ない練習の密度を高める。

・ホームページを開設して、練習時の指揮者からの注意事項、練習内容を録音したものを配信するなどして、練習の質と効率を高める。

・音取り用のCDを作成し、希望者に配り初心者のレベルを引き上げる。　等々

こうした変化への対応努力に、一般の合唱団よりも、職場合唱団のほうが積極的に取り組んでいるように思う。

四　職場合唱団の将来

高齢化社会の進展を背景に、職場合唱団へのニーズと関心は、今後高まるように思う。私にとっても、自分の音楽活動の中で健康が許す限り、できるだけ続けたいと願っている。

それは、次のようなことがあるからだ。

・歌うことが、呼吸法、集中力、記憶力を鍛え、加齢対策として役立つ。

・幅広い年齢層や音楽経験を持つメンバーと接することで、先輩の団員が元気で歌い続ける姿に勇気づけられる一方で、後輩の若さ、活力に刺激を受けることができる。また、混声合唱ならでの程良い異性メンバーとの付き合いを保つことが自然にできる。

・職業人生時代の体験が共有でき、付き合い安く安心感がある。

職場の仲間、人間関係を求心力とする「職場合唱団」は、これからも変化に対応しながら、アマチュアの音楽活動の中で、重要な場所を占めて行くものと期待している。